

新入生を迎える

(小学校の立場から)

カリキュラムの連絡より



小林 操

ぶか／＼の帽子、新しいランドセル、手首もかくれるような大きめの新調服、きちんとたゝんだハンカチに名前を書いて胸高に留めた新一年生が、母に、父に、兄姉に附添われてそれぞれの学校の校門に吸い込まれていく風景は、春にふさわしい、心あたたまる情景である。私は何十回となく春毎にこの情景を経験して来たが、これほど新鮮で希望にみちた行事は、一年を通して他には一寸見られないようにさえ思われる。

ひとつの学校に入学して来る一年生は、百人あれば、百の家庭から来るのである。百の家庭は、その情況や環境においてそれぞれ完全に百種類の異った生活環境の中に生い立った子供たちであることは、すべての教育活動の先行条件として考えられなくてはならないのは言うまでもない。この言うまでもないところに最も基本的な異／＼の問題がある。この問題を十分に検討し、考慮し、工夫してその上に行き届いた教育計画が立てられなくてはならない。

それぞれ異った生活環境から学校という集団社会につながる所に、不自然なものが目立ったり、喰い違いがあったり、なめらかにつながらなかつたりするようなことがあると、子供たちは非常に不安定な情態に陥入り、その影響が大きく、且つその子供の将来を左右するような事さえある。こゝに、送り込むもの、迎え入れるものゝこまやかな心遣いと細心の注意と苦心とが要求される。

異った各家庭の生活環境は、一まずおき、新入児童の入学前における生活の実態を考えて見ると、家庭から直ぐに小学校

へ入学するもの、幼稚園の経験を経て入学するもの、保育所から入学するものが考えられる。幼稚園から入学するもの、中にも三年保育、二年保育、一年保育とその経験年数に差がある。保育所を経て来るものも経験年数の差は、これもまた幼稚園と同様である。

就学前幼児の保育機関が、小学校と同じ程度に充実していない現状では、新一年生の就学前の経験実態と小学校単位に考えて見ると、その比率には多少の差は見られるけれども、大体次の三つの場合が考えられる。

新一年生全体の九十パーセント以上が幼稚園又は保育所を卒えている場合。

幼稚園、保育所を卒えたものと、家庭から直接入学して来たものが、半々程度に混っている場合。

殆ど大部分が家庭から直接入学して来たもので、幼稚園や保育所を卒えて来たものはほんの僅かである場合。

こゝに新一年生を送り込む幼稚園や保育所側の苦心があり新一年を迎え入れる小学校側の苦心があり、この両者の苦心が、幼稚園、保育所と小学校との連関問題に発展して来るのである。

幼稚園と小学校低学年との関連問題についての関心は最近非常に高まって来て、各方面で研究が積まれているが、現実には必ずしもその実績なり効果なりが挙がっているという段

階には立っていない。

幼稚園と小学校との教育計画（カリキュラム）は、幼稚園小学校を全体として考えられたものでなくてはならないという理論に誤りはない。たしかにその通りである。併しながら現実には先にもあげたように、理論通りには行かない実情である。

新入児童の九十パーセントまで幼稚園を卒えたものである場合には、この理論は可能であるかも知れない。しかも理想的に言えば、国立の幼稚園と小学校のような関係にあるとかその小学校に併設せられている幼稚園を卒えたものが、殆ど全部であるという場合に限定せられて来るのである。

現状のように幼稚園は国立や公立よりも、むしろ私立の幼稚園の方が多い場合には、私立の幼稚園を卒えた幼児は、幾つかの小学校に分散して入学していくのであるから、一つの幼稚園の教育計画（カリキュラム）が、幾つかのどの小学校にもうまく関連していくということは困難であろう。保育所の場合は幼稚園以上に教育計画に一貫性をもたせることは困難だと言える。

実際の場合を考えて見よう。ある学校の新一年生百人の中に、幼稚園を卒えたものが四十名。（その四十名は五つの幼稚園を卒えたもの。）保育所を卒えたものが一五名。あと四十五名は家庭から直接入学して来たものとしたら、受け入れ

る小学校側としてどうしたらいいだろうか、幼稚園と保育所を卒えた五五名で一学級を編成し、家庭から直ぐに入学して来た四五名を一学級に編成して経営することが果していいだろうか。無条件につきまぜて、五十名づつの二学級編成でいいのだろうか。この辺には未解決の問題が残されているように思われる。

幼稚園を卒えた子供は、一年に入つて、幼稚園のときの繰返しのようなことをやっているうちに、小学校をあまく見て興味が失われていくようなことはないか。

幼稚園の先生方からは、せつかく幼稚園で申しかけておいたいろ／＼の芽生えが、小学校に入つた途端に押えられてしまったという声になりはしないか。

小学校の先生方からは、幼稚園から来た子供は、行儀がわるくて、さわがしくて学級を乱して困るなどという声になつて出はしないか。

父母の側からは、幼稚園から来た子供ばかりが、学芸会や音楽会で活躍しているなどといった不満の声となりはしないか。

いま私は実際に起りつゝある声、又は起りはしないかと思われる具体的な問題のいくつかを思いつくまゝに列べて見たが、これらの具体的な問題の中には、幼稚園と小学校との連関についての大きな問題へのつながりをもっていることを、

みんなで考えて見たいと思う。

学芸会や音楽会に出る子供についての親の見方は、既に幼稚園のときから、多分に利己的な誤つた考え方があつた。これは幼稚園の先生方が、常に学芸会や音楽会の正しい在り方と意味、この見方についての正しい方向を親に向つて理解させる努力をもつと払う必要がある。わが子のことはかりを考へる親はまだ／＼多い。これが啓蒙はひとり幼稚園だけの問題でなく、小学校へも直結する大事な問題である。

小学校の先生方が、幼稚園を卒えた子供に対する見方は、時に表面的ならみがないでもない。日頃幼稚園の先生方がどんな計画のもとに、毎日の保育をどんな風に実践しているかを、十分に理解してもらつたことが何よりも先である。子供の生活経験をもとに学習指導をおし進めようとするならば幼稚園の保育の方法を、小学校一、二年にはもつとたくさん取入れたいとさえ思う。それには小学校の先生方が、もつと幼稚園の保育の実際の中に入つて、共に研究を重ねていくことが必要である。幼稚園終了児が集団生活になれていくことが必要である。幼稚園終了児が集団生活になれていくので、さわぐとか、行儀がわるいとかいうのは甚だまずい。集団生活の経験のない家庭から直ぐに入学した子供たちにしても、なれて来れば元気にふるまふ素質はもつているのである。これは経験豊かな小学校の先生方の幼稚園を理解しての上にあつてのよき取扱いに俟つべきものであろう。

幼稚園の先生方は、自分たちの保育した子供たちが、小学校に入学して、どんな指導をうけ、どんな生活を経験して行くかについて十分の理解があるかどうか。幼稚園の教育が、もろ／＼の素質の芽生えを培って、人格形成への素地を指導しようとするならば、手がけた子供たちのつながって行く小学校の、せめても一、二年の実際を十分に理解していることは当然のことと言わなくてはなるまい。小学校一年の指導は自分達が幼稚園でやった保育の実際を延長したものでなくてはならないなど、決めてしまうことは早計である。そこで小学校における子供たちの活動の実際をひまの毎に見て時には一、二年担任の先生と研究会をもつて、両者の連関が無駄なく、なめらかに進められるように話合うことが大切である。幼稚園の先生方の忙しいことはよくわかる、併し自分たちの手がけた子供たちの進んで行く、小学校一、二年の実情を理解しないで、幼稚園での保育を考えることは片手落ちといわなくてはなるまい。

以上述べて来た問題の中には現場にいるものだけが、どんなにやきもきしても簡単に解決のつかないものがたくさんある。幼稚園教育が義務教育でないという理由で、問題の解決がおくれているようなことがあるとすれば、大きな間違いであって、就学前の幼児教育が本当に必要であることが結論づ

けられており、現に幼稚園への入園を希望するものが収容人員の何倍かになっているという実情を考えれば、これが対策は当然考究され解決されるべきである。口を開けば幼児教育の重要性を説きながら、一方ではこれに即応する対策が講ぜられていないのは誠に遺憾である。しかしながら、われ／＼現場にあるものは、幼児教育の効果を挙げることに工夫と努力を注いで行くことが与えられた任務であることを思い、幼稚園、保育所を終了した子供たちが小学校に入学して、その保育効果が無駄なく活用され、その上に小学校の教育が積み重ねられて行くような方策を研究し実践して行きたい。

漫然と思いつくまゝを述べて来たが、幼児を小学校へ送り込む幼稚園の先生方は、日頃の保育計画の中に、小学校に行つてなめらかに学習指導の受けられるような基本的なことがらの生活指導を身につけておき度い。幼稚園 unnecessary論をさえ唱える小学校の先生もまれにはあるが、これが無理解の上での発言であれば暴言にすぎないが、われ／＼としては、幼児保育の効果を的確にあげるような努力が、更に一層払われなくてはならぬと思われる。

(城東小学校長・同附属幼稚園長)

× × × × × × × ×